

平成30年 5月 2日現在

機関番号：57501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02026

研究課題名(和文) 後期フッサールの現象学的還元の解明

研究課題名(英文) The clarification of phenomenological reduction in late Husserl

研究代表者

堀 栄造 (Hori, Eizo)

大分工業高等専門学校・一般科文系・教授

研究者番号：50229209

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：フッサールの中期思想の総決算の書である『イデー』(1913年)からフッサール後期思想の集大成の書である『危機書』(1935年～1936年執筆)へ至る「フッサールの後期還元思想」の透徹した解明を行った。まず、1910年代のフッサール現象学が学問論的に諸転回を遂げながら『危機書』の基礎を形成していった過程を究明した。つまり、『危機書』の学問論の原型の形成、存在論的転回、形相的心理学的転回、實在論的転回、具体的事実的転回、実存的転回を明らかにした。さらに、1920・30年代のフッサールの「実存的生を把握する実存的現象学」の形成過程を究明した。

研究成果の概要(英文)：I have achieved the clarification of Husserl's late reduction-thought from *Ideen* (1913) to *Krisis* (1935-1936). First, I have clarified that in 1910s Husserl's phenomenology formed the foundation of *Krisis* in some turns: ontological turn, ideal psychological turn, realistic turn, concrete factual turn, existential turn. Second, I have clarified that from 1920s to the half of 1930s Husserl formed the existential phenomenology which gripped the life.

研究分野：哲学

キーワード：西洋哲学 現象学 フッサール 還元思想

1. 研究開始当初の背景

ドイツの哲学者エドムント・フッサール(1859-1938)が創始した哲学である現象学の方法は、現象学的還元と呼ばれている。それは、世界や世界内の諸事物の現存の定立を遮断し、定立作用および定立内容を保留状態にして、定立作用たる主観性と定立内容たる客観性の相関性としての認識論の本質を純粹かつ中立的に捉えることである。本研究者の従来の研究の主要な目的は、現象学的還元の遂行の際の具体的操作つまり現象学的還元の具体的内容を徹底的に究明することであった。それは、拙著『フッサールの現象学的還元 - 1890年代から「イデー」まで -』(晃洋書房、2003年)によって果たされ、1890年代のフッサールの還元思想の初期段階(前期フッサールの還元思想)から『イデー』(1913年、中期フッサールの還元思想の著者)へ至るフッサールの還元思想の展開における現象学的還元という哲学的方法の形成過程が究明された。しかし、この拙著においては、現象学的還元という哲学的方法の形成過程において一体何が哲学的成果として獲得されたのかということは、未だ明確にはななかった。そこで、拙著『フッサールの脱現実化的現実化』(晃洋書房、2006年)においては、現象学的還元という哲学的方法の目的を「脱現実化的現実化」つまり「実在的現実を脱却することによって真の現実を捉えること」と把握し、現象学的還元という哲学的方法の形成過程において哲学的成果として獲得される真の現実が究明された。つまり、この拙著によって、現象学的還元の形成過程における脱現実化的現実化の段階的進展に応じてその所産として獲得される現象学的認識論の本質たる真の現実の段階的進展が究明された。それゆえ、本研究者の従来の研究成果は、フッサールの還元思想の展開の前期たる 1890年代から中期の『イデー』(1913年)へ至るフッサールの還元思想の展開における現象学的還元という哲学的方法の形成過程を徹底的に究明したことであるが、それは、前期フッサールの還元思想および中期フッサールの還元思想の解明という意義を担っている。したがって、本研究は、前・中期フッサールの還元思想を大幅に深化させて変貌を遂げる後期フッサールの哲学的方法である現象学的還元がどのような具体的操作と構造と成果をもつのかを徹底的に究明する。

2. 研究の目的

本研究の目的は、後期フッサール(1913-1936年)の現象学的還元の解明である。【平成 27年度】は、後期フッサール(1913-1936年)の後半期(1927年以降)の成熟を見せる現象学的還元において、自然的態度の次元と超越論的態度の次元の相互転換関係の深化や、現象学的反省の具体的操作としてのヴァリエーションの深化や、環境世界および真の世界と

いう後期固有の深化した概念等々について明らかにする。【平成 28年度】は、フッサールの晩年(1929年以降)における現象学的還元において、心理学的還元と超越論的還元の相互転換関係の深化や、超越論的なものの世界化ないし心理学化や、自然的前理論的態度と理論的態度の相互関係とそれに関して前所与としての世界から主観性へ至る基礎づける遡行の諸困難等々について明らかにする。【平成 29年度】は、フッサールの最晩年(1931年以降)における現象学的還元において、超越論的自己意識と人間的自己意識の相互転換関係の深化や、超越論的エゴ解釈としての超越論的還元の究極的形態と自然的次元で領域的構造を明示する形相的心理学(現象学的心理学)の究極的形態や、現象学的反省の具体的操作としてのヴァリエーションの究極的形態について明らかにする。

3. 研究の方法

【平成 27年度】は、世界の現象学研究の中心であるベルギー国ルーヴァン大学附属フッサール・アルヒーフで未公開遺稿等々の諸資料を閲覧し、貴重な研究資料を獲得する。ベルギー国での調査は、二週間程度である。そして、渡欧によって獲得された未公開遺稿等の研究資料や近年続々と公開されているフッサール全集の諸草稿等を解読する。渡欧によって獲得される未公開遺稿としては、次のようなものがある。『Reduktion.Epoche.』[B 4,1926-1934年:『還元、エポケー』]、『Grundlegende Untersuchungen zur Klärung der Idee Umwelt und wahre Welt und von da zur Klärung der personalistischen Einstellung.』[A 9,1927年:『環境世界および真の世界という理念の解明そしてそこから的人格主義的態度の解明についての基礎的研究』]、『Materiale Ontologie als Wissenschaftslehre.』[B 7,1928-1929年:『学問論としての質料的存在論』]、『Gang zur phänomenologischen Reduktion.Drei Stufen der Erkenntnistheorie.』[B 10,1929年以降:『現象学的還元への歩み、認識論の三つの段階』]。また、この時期のフッサール全集所収の諸草稿としては、『Zur phänomenologischen Reduktion』[『現象学的還元について』(フッサール全集第34巻、2002年)]所収の「自然的態度への還帰の問題」[Nr.1,1926年秋]、「超越論的還元」[Nr.6,1929年]、『Zur Lehre vom Wesen und zur Methode der eidetischen Variation』[『本質の学説および形相的ヴァリエーションの方法について』(フッサール全集第41巻、2012年)]所収の「世界の形相的存在論」[Nr.28,1926年10月]等々多数。後期フッサール(1913-1936年)の後半期(1927年以降)の成熟を見せる現象学的還元において、自然的態度の次元と超越論的態度の次元の相互転換関係の問題の深化や、現象学的反省の具体的操作としてのヴァリエーションや、環境世界および真の世界という理念そしてそれ

と関連する人格主義的態度や、自然的態度とそれと関連して自然的経験の世界と自然的生の相関の様式について究明する。【平成 28 年度】は、渡欧によって獲得された未公開遺稿等の研究資料や近年続々と公刊されているフッサール全集の諸草稿等を解読することによって遂行される。渡欧によって獲得される未公開遺稿としては、次のようなものがある。『Transzendente Reduktion』[B 5, 1930 年:『超越論的還元』]、『Sinn und Funktion der Epoche.』[B 5, 1930 年:『エポケーの意味と機能』]、『Die Paradoxie der psychologischen Epoche.』[B14, 1930-1931 年:『心理学的エポケーのパラドックス』]、『Natürliche vorthoretische Einstellung und theoretische Einstellung.』[A 20, 1930-1931 年:『自然的前理論的態度と理論的態度』]、『Zur phänomenologischen Reduktion. Die Modanisierung oder Psychologisierung des transzendenten, die Phänomenologie in der Weltgeschichte.』[B 5, 1931 年:『現象学的還元について 超越論的なものの世界内化ないし心理学化、世界史における現象学』]。また、この時期のフッサール全集所収の諸草稿としては、フッサール全集第 34 巻所収の「エポケーと還元、超越論的主観性の様態としての自然的態度」[Nr. 8, 1930 年 8 月初め]、「前所与としての世界から主観性へ至る基礎づける遡行の諸困難」[Nr. 16, 1931 年春]等々多数。フッサールの晩年(1929 年以降)における現象学的還元において、心理学的還元と超越論的還元の相互転換関係の問題の深化や、エポケーと反省の意味と機能の問題の深化や、超越論的なものの世界内化ないし心理学化や、自然的前理論的態度と理論的態度の相互関係の問題とそれに関連して前所与としての世界から主観性へ至る基礎づける遡行の諸困難について究明する。【平成 29 年度】は、渡欧によって獲得される未公開遺稿等の研究資料や近年続々と公刊されているフッサール全集の諸草稿等を解読することによって遂行される。渡欧によって獲得される未公開遺稿としては、次のようなものがある。『Transzendente Reduktion. Ego. Auslegung des transzendenten Ego und ihre Methode.』[B 13, 1930-1934 年:『超越論的還元、エゴ、超越論的エゴの解釈とその方法』]、『Zum Eintritt in die phänomenologische Reduktion. Weg zur phänomenologischen Reduktion.』[B 5, 1933 年:『現象学的還元へ入ることについて、現象学的還元への道』]、『Wie der Aufweis der regionalen Struktur?』[A 3, 1934 年:『領域的構造の明示はどうなのか』]、『Weg von der geisteswissenschaftlichen Einstellung als Einstellung auf das Faktische der geschichtlichen Welt in die universale eidetische Einstellung.』[A 12, 1934 年:『歴史的世界の事実的なものへの態度としての精神科学

的態度から普遍的形相的態度への道』]、『Zum Übergang in die transzendente Epoche. Psychologische Epoche und transzendente Epoche.』[K 4, 1934-1935 年:『超越論的エポケーへの移行について、心理学的エポケーと超越論的エポケー』]、『Die Verwandlung des natürlichen Lebens durch die phänomenologische Besinnung.』[B 12, 1935 年:『現象学的省察による自然的生の転換』]、『Motive zum Eintreten in eine universale Selbstbesinnung.』[B 14, 1935 年:『普遍的自己省察へ入る動機』]、『Variation und Ontologie』[K 12, 1935 年:『ヴァリエーションと存在論』]。また、この時期のフッサール全集所収の諸草稿としては、フッサール全集第 34 巻所収の「エポケーの二重の意味」[Nr. 30, 1933 年 3 月初め]、「現象学的還元の始まり」[Nr. 36, 1935 年 1 月半ば]、フッサール全集第 41 巻所収の「私の事実的自我としての作用的能作としての純粋本質の自由なヴァリエーションと獲得」[Beilage, 1935 年 10 月初め]等々多数。フッサールの最晩年(1931 年以降)における現象学的還元において、超越論的自己意識と人間的自己意識の相互転換関係の問題の深化や、超越論的エゴの解釈としての超越論的還元の究極的形態と自然的次元で領域的構造を明示する形相的心理学(現象学的心理学)の究極的形態や、現象学的反省の具体的操作としてのヴァリエーションの究極的形態について究明する。

4. 研究成果

本研究は、フッサール中期思想の総決算の書である『イデー』(1913 年)以降、フッサールの後期還元思想が、フッサール後期思想の集大成の書である『危機書』(1935-1936 年執筆)へ向けて、1910 年代に『危機書』の基礎を形作るフッサール現象学の諸転回を遂げ、1920・30 年代に実存的生の把握としての実存的現象学の形成を遂げて集束していくさまを解明した。

『危機書』の基礎を形作る 1910 年代に、フッサール現象学の諸転回の第一として、『危機書』の学問論の原型が、形作られる。つまり、第一に、『イデー』(1912 年)における学問論が、質料・心・精神といった実在的な存在論的領域を構成的現象学によって基礎づけるという構図を設定し、それぞれの実在的な存在論的領域に存立する実在的な諸学問を現象学によって超越論的に基礎づけるという枠組みを確定した。第二に、1919 年の夏学期講義「自然と精神」における学問論が、可能的諸学問をアポステリオリな経験的諸科学とアプリオリな形相学としての領域的存在論に区分し、前者の骨格を成す後者を現象学によって超越論的に基礎づけることによって、厳密な学問体系の創立を企図するとともに、物的自然の存在論および現象学の基本路線に関して、具体的事物ファントムの存在論を中核とする超越論的感性論

の導入によって、存在論と現象学の架橋を学問論的分析として具体的に遂行した。第三に、1919年の夏学期講義「自然と精神」における学問論は、『危機書』の学問論の原型を成すものであり、学問論的転回点としての意義を担うものであると言える。

『危機書』の基礎を形作る 1910 年代に、フッサール現象学の諸転回としての第二として、存在論的転回が、遂げられる。つまり、第一に、1906/07 年時点で、実在的存在論の導入による論理学の理念の拡張によって、分析論を越える学問論の理念の拡張が遂行された。第二に、1910/11 年時点で、実在的存在論は、総合的形式的存在論としての自然的存在論として具体的に構想され、自然の領域的存在論の可能性が開かれた。第三に、自然の領域的存在論の可能性は、1917/18 年時点で、自然と精神を主題とする領域的存在論として拡張的に現実化された。第四に、1912-1915 年時点で、自然、身体、心、自我、人間といった実在的諸領域がすでに事実上主題化され、自然と精神を主題とする領域的存在論がすでに実質的に遂行された。第五に、フッサールの存在論的転回にとって、実在的存在論は、学問論的意義のみならず、超越論的現象学へ至る道の一環を成すという意義をも有すると言える。

『危機書』の基礎を形作る 1910 年代に、フッサール現象学の諸転回の第三として、形相的心理学的転回が、遂げられる。つまり、第一に、1911 年時点のフッサールは、自然科学や精神科学等々の諸科学を現象学によって基礎づけるという構想を抱き、諸科学の存立する存在論的次元の層とその基底を成す現象学的次元の層の層状化を企図した。第二に、『イデー』(1913 年)の時点で、形相的心理学は、学問論的に見て、自然的態度の存在論的次元に経験的心理学とは峻別されて位置づけられるとともに、存在論的次元の基底を成す現象学的次元の純粹現象学(超越論的現象学)と並行するものとして位置づけられた。第三に、『イデー』(1912-1915 年執筆)の時点で、自然科学的経験や精神科学的経験や心理学的経験といった実在的な現実経験を存在論的次元で分析する現象学としての形相的心理学が、体系的に遂行された。第四に、1917 年時点で、実在的次元に成立する経験的心理学、その本質学としての形相的心理学、それら両者の基底としての超越論的次元に成立する現象学という三層構造が確立された。第五に、1917 年時点で、形相的心理学の領域は、意識現実性の領域つまり現実的であるような純粹な自我体験の領域ということになり、超越論的現象学の領域は、意識可能性の領域つまり純粹な自我体験の諸可能性の領域ということになった。

『危機書』の基礎を形作る 1910 年代に、フッサール現象学の諸転回の第四として、実在論的転回が、遂げられる。つまり、第一に、『イデー』(1913 年)におけるフッサール

の現象学的観念論は、『イデー』(1912-1915 年執筆)においては「自然と精神」という実在を主題とする実在論的傾向を帯びた叙述へと実在論的転回を遂げた。第二に、『イデー』(1913 年)におけるフッサールの観念論的傾向に対して、フッサールの弟子たちによってさまざまな異議が唱えられ、それに対してフッサールは自己弁護しつつ実在論的傾向を帯びた。第三に、個体としての本質を説くジャン・エランの本質研究の核心は、エイドスがモルフェーを介して個体(個物)としての対象の本質を指定するという実在論的な現象学的解釈であると言える。第四に、フッサールとその弟子たちは、ジャン・エランの本質研究に同意し、とりわけフッサールはそれによって強い啓発を受けた。第五に、フッサールが『イデー』(1912-1915 年執筆)において実際に自然と精神という実在を主題化する際に実在論的傾向を帯びていくようになるのは、1913 年の夏学期以降の弟子たちとの仮借ない批判的な議論に啓発されたことであり、とりわけ、ジャン・エランの説く個体としての本質の啓発は、フッサールの実在論的転回にとってきわめて大きな意義をもつと言える。

『危機書』の基礎を形作る 1910 年代に、フッサール現象学の諸転回の第五として、具体的事象的転回が、遂げられる。つまり、第一に、根源的意識流における対象の構成において、根源的意識は、構成的に個体化を遂行し、A という内容の或る感覚的な根源現在化的意識もその相関者である A という内容の個体も、たった一度だけ現れうると言える。第二に、個体化は、或る唯一のものであるような個体化する契機とエイドスとしての本質との一体化によって成立すると言える。第三に、個体化する契機は、超越論的主観性の個体化する能作が差異化されたものとしての個体を規定する際の唯一の特定の時間区間や空間区間あるいは空間有体であると言える。第四に、現実的個体化は、究極的には一回限り現れうる唯一の個体性をもつ時間点および場所点(空間点)によって規定された時間区間および空間区間ないし時間間隔および場所間隔(空間間隔)が、一对の始点と終点をもつ時間点的個体および場所点的個体(空間点的個体)を成立させると言える。第五に、1917/18 年のベルナウ草稿における個体化の現象学は、純粹な理念的次元で遂行されたフッサールの従来の実在的存在論に対して、新たに、経験的な事実的現実性の領域を開示したものである。第六に、1917/18 年のベルナウ草稿は、個体としての対象の認識を中核とする具体的事象的経験および現実的な経験的世界に基づいて抽象的理念的な認識および可能的な理念的世界を現象学的に基礎づけるというフッサール後期還元思想の基軸を樹立する大転回点だと言える。

『危機書』の基礎を形作る 1910 年代に、

フッサール現象学の諸転回の第六として、実存的転回が、遂げられる。つまり、第一に、1917年のフッサールの草稿における「生活世界」という語の導入の背景に、フッサールの実存的転回との結び付きがあると言える。第二に、1916年から1917年へかけてのフッサールを取り巻く実存的状況が、フッサールの実存的転回にとって重要な意味をもつと言える。第三に、フッサールが1917年および1918年に行った講義「フィヒテの人間性の理想」のうちに、実存的生き方に関するフッサールの思想が、見いだされると言える。第四に、フッサールの実存的転回の思想的核心は、「プラトンの本質真理」から「アリストテレス的事実真理」への転換であると言える。第五に、フッサールの実存的転回は、思想史上重要な意義をもつと同時に、フッサールの後期思想における転回点としての意義をもつと言える。

1920年代前半には、フッサールによって樹立される「第一哲学」の理念が、『危機書』の学問論的枠組みとなる。つまり、第一に、1922年のロンドン講演とそれを拡張的に仕上げようとした1922/23年の哲学入門講義の新たな構想に基づく学問論は、哲学的体系の普遍性という量的契機と哲学的体系の絶対的正当化という質的契機を軸にして展開した。第二に、フッサールの思想展開における1922年のロンドン講演の意義は、必当性を指標とする現象学の自己批判による学問論の絶対的正当化および絶対的普遍化に存すると言える。第三に、フッサールは、『イデー』の1910年代までは現象学の理念に基づいて現象学入門を叙述することで精一杯であったが、1922/23年の哲学入門講義において哲学の理念に基づいて哲学入門を叙述することにより必当的還元を主題化することになった。第四に、1922/23年の哲学入門講義において主観的認識の批判が遂行され、1923/24年の第一哲学講義において客観的認識の批判が遂行されたと解釈すれば、両講義の補完的關係が納得のいくものとなり、それゆえ、1920年代前半のフッサールは、学問論的に見た第一哲学の理念に基づいて『危機書』の学問論的枠組みを形作ったものと言える。

1920年代前半には、第一哲学の理念の樹立に基づいて形作られた『危機書』の学問論的枠組みは、実質的には非デカルト的道となる。つまり、第一に、フッサールの1920年の覚え書きのうちに、自然的次元の形相的心理学（現象学的心理学）を経由して超越論的現象学へ至ろうとする非デカルト的道の萌芽が、見いだされた。第二に、フッサールの1923年の草稿において、フッサールは、自然的次元で形相的心理学（現象学的心理学）を遂行することによって具体的形而上学を樹立し、それを手引として超越論的現象学へ至ることにより、自然的次元から超越論的次元へ至ることのラディカルな自己理解や首尾一貫

した詳論を十分なものにし、超越論的主観性の意義や具体的本質構造を一般の人々にとって理解しやすいものにしようとして非デカルト的道へ転換したものである。第三に、1923/24年の冬学期講義「第一哲学」の時点では、非デカルト的道をめぐるフッサールの思想はかなり成熟し、非デカルト的道は、形相的心理学（現象学的心理学）から超越論的現象学へ至る道として構造化されたものである。第四に、1925年時点で、経験的世界（自然）の形相的心理学（現象学的心理学）を介して超越論的主観性へ至る道つまり存在論を介しての道と、主観的生の形相的心理学（現象学的心理学）を介して超越論的主観性へ至る道つまり心理学を介しての道という二つの道として体系化され、その体系化された二つの道は、『危機書』の第三部「超越論的問題の解明とそれに関連する心理学の機能」において区分された「(A)前以て与えられた生活世界からの遡行的問いにおける現象学的超越論的哲学への道」と「(B)心理学から現象学的超越論的哲学へ至る道」という学問論的枠組みに他ならないと言える。第五に、1925年時点のきわめて円熟味を帯びた形相的心理学（現象学的心理学）によって把握される形相は、個体認識の際に個体に対してその鑄型として嵌り込み個体を個体として存立させるようなアリストテレス的な意味での形相であり、形而上学的解釈に先立って個体の存立と同時に個体を枠取り個体の個別化つまり個体化を可能にする形相であると言える。

1920年代の後半には、実存的生を主題化する実存的現象学が、形作られる。つまり、第一に、1926年10月時点で、自然的態度を取る自然的生の主題化が、超越論的世界考察へ至る際に不可欠であることが明言され、自然的態度の意義の転換が存立した。第二に、1926年10月時点で、自然的態度を取る自然的生は、純粹心理学（現象学的心理学）の主題となりうると同時に超越論的現象学の主題ともなりうるものであり、二重の主題化を被りうると言える。第三に、1926年10月時点で、世界の前所与性という概念の導入とともに自然的生の様式一般およびその世界の超越論的解釈という自然的生およびその世界の超越論的解釈としての超越論的觀念論が確立された。第四に、1926年10月時点で、超越論的現象学によって主題化される自然的生は、可能な抽象的理念的生ではなく、「現実の具体的事実的生」としての「実存的生」であり、超越論的現象学は、「実存的生の本質把握」をめざす「実存的現象学」である、ということが明らかになった。それとともに、それは、「方法そのものの実存的意味」を担う「実存的現象学」である、ということが明らかとなった。第五に、1926年10月時点で、神性ないし永遠のものとしての理性的生つまり絶対的生が、個々人におけるそしてその時代における有限性をもつ生を必然的に超

越論的に貫いているのであるが、現実の不完全な人間としてのモナドは、絶対的生から逸れて隔たりそうになりつつも、理性的に自覚してモナドの真理やモナドの究極目標へ近づくように努めなければならない、という実存的超越論的現象学的形而上学が説かれた。そして、それは、のちの『危機書』の第一部が説く「学問の生に対する有意義性の喪失」としての「学問の危機」を克服する「理論的自律性」および「実践的自律性」である、ということが明らかになった。

1920年代後半には、現象学的心理学の方法としての形相的ヴァリエーションの具体的な操作が、詳細に記述され、形相的ヴァリエーションにおける形相の真の意義が、フッサールによってアリストテレス的な意味において把握される。つまり、第一に、フッサールは、1925年の夏学期講義「現象学的心理学」において、現象学的心理学の方法としての形相的ヴァリエーションの具体的な操作を初めて詳述した。第二に、1925年の夏学期講義「現象学的心理学」の時点でのフッサールによる形相の意義の把握は、誤りであったと言える。第三に、フッサールは、1927年には、形相的ヴァリエーションにおける形相の真の意義をアリストテレス的な意味において把握したと言える。第四に、フッサールは、1928年には、質料的な事物から成る自然の領域の一般性つまり領域の一般性に対してのみ形相的ヴァリエーションを適合させるという形で現象学的心理学を事実即したより一層具体的な実証的学問にし、また、「事物領域一般という領域の形式様式」の解明と「純粹自我や自我共同体一般や意識生一般の全く不変の様式」の解明という両解明の同時進行によって同時発生的テーゼに基づく形相的ヴァリエーションをより一層具体的に行使する点で、現象学的心理学を深化させた。

1930年代前半には、実存的生のあり方を全面的に捉える実存的現象学としての哲学的に真正の人間学が、形作られる。つまり、第一に、1930年夏の時点で、自然科学の主題と純粹心理学（現象学的心理学）の主題の区別が行われ、『危機書』の第二部「物理学主義的客観主義と超越論的主観主義との間の近代対立の起源の解明」と、第三部「超越論的問題の解明とそれに関係づけられた心理学の機能」の著作構想上の枠組みが確立された。第二に、1930年夏の時点で、純粹心理学（現象学的心理学）の具体的な内実とその困難に関するフッサールの叙述とは、従来に比べてはるかに深化した。第三に、1930年夏の時点のフッサールの超越論的反省の方法とその実存的意味の強調による人間的主観性の可能なかぎりの理解は、実存的生のあらゆるあり方を捉えようとする実存的現象学としての哲学的に真正の人間学であると言える。第四に、1930年夏の時点のフッサールの超越論的現象学は、根源的な生き生きとした現在における自我へ帰還し、世界エポケーから遡

行的に問いつつ生き生きとした現在の構造を解明し、先行する生の解釈とその本質構造の確認を方法的原理とする現象学的自己省察だと言える。

1930年代前半には、『危機書』を生み出す直前のいわば『危機書』の前夜と呼ぶべき時期を迎える。つまり、第一に、1933年3月初めの時点での「最晩年の現象学の射程」においては、世界内的現象学（現象学的心理学）における個別のエポケーが超越論的現象学における世界エポケーに対して部分的エポケーとして位置づけられた。第二に、1933年8月半ばの時点での「最晩年の前所与性から出発する遡行的問いの里程」は、自然的世界内性の次元で遂行される世界内的現象学（現象学的心理学）を経由して超越論的現象学へ至るという構図を取った。第三に、1933年9月の時点で、「自然的世界生を前提とした普遍のエポケー（超越論的現象学的エポケー）」によって、世界内的現象学（現象学的心理学）には隠されたままであった超越論的構成ないし超越論的世界創造の「露呈」ないし「解釈」ないし「解明」が遂行された。第四に、1934年春の時点で、『危機書』で取られる超越論的現象学へ至る二つの道つまり「存在論を介しての道」と「心理学を介しての道」を胚胎した。第五に、1935年1月の時点で、最晩年の超越論的現象学的本質つまり自然的生の事実性に根ざした「事実の本質」を把握するために、「超越論的想起」という超越論的現象学的本質把握の方法を用いた。第六に、1935年秋の時点で、「最晩年の超越論的現象学的本質把握の具体的な操作としてのヴァリエーション」という「必当然的世界確信によって拘束された世界の形相学における空想」を用いた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

堀栄造、「フッサールの実存的現象学(1930年夏)」、『筑波哲学』第26号所収、23-34頁、2018年、査読有。

(URL)<http://doi.org/10.15068/00151057>

堀栄造、「フッサールの「哲学的に真正の人間学」(1930年夏)」、『筑波哲学』第25号所収、1-17頁、2017年、査読有。

(URL)<http://doi.org/10.15068/00145662>

堀栄造、「フッサールの「自然的な生のあり方への帰還」(1926年10月)」、『筑波哲学』第24号所収、1-14頁、2016年、査読有。

(URL)<http://doi.org/10.15068/00143358>

〔図書〕(計1件)

堀栄造、『フッサールの後期還元思想 - 『危機書』への集束 - 』、晃洋書房、全252頁、2017年。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

堀 栄造 (HORI Eizo)

大分工業高等専門学校・一般科文系・教授

研究者番号：50229209